

『醒睡笑』所収笑話における「花よりも団子」の意味的重層性について

漆崎 正人

一 はじめに

拙本『醒睡笑』(1623年成立)には、「落書」という標題の下に、一連の笑話が掲載されているが、広本系『醒睡笑』には、「花よりも団子」を句の一部に有する落書から成る話(以下、「当話」と呼ぶ)が存する。例えば、「静嘉堂文庫蔵本」には、

一 信長公始て京都に石垣の普請被仰付毎日石を引音喧

しかりければ

花よりもだこの京とぞ成にけりけふもいしくあすも
いしく註一

のように見える。

『醒睡笑』の「落書」について、岩波文庫本『醒睡笑(上)』(岩波書店・一九八六年刊)(以下、『岩波』と呼ぶ)の校注者の鈴木棠三氏は、

諷刺やあざけりを匿名で示すもの。狂歌の形をとるものの特
に落首という。本章の実質は落首を中心とする狂歌咄註二。

と解説している。したがって、「当話」も落首を中心とする狂歌

咄とみえていなる。

とこそなる落書に關しては、ロドリゲス『日本大文典』(16048
年刊)では、具体例を挙げて詳述している。

『*Alguns pasquins que se compoem em verso, que se chamam Racuxo, sam desta sorte de verso de sentido, palavras equiuocas tocando sotilmente na pessoa, ou materia. Vi, no Taiteiqui.*

Codzugauano, xejeno iuanami fayaquereba,

Caquete fodonagu, voicuru Tacafaxi.

Este se fez a hum capitan chamado Tacafaxi o qual secretamente deixando o demais exercito passando o rio Codzugaua, foy dar na fortaleza dos inimigos, tomou fingido de sbaratado, neste rio lhe mataram muyta gente. Caquru he fazer ponte, dar nos inimigos, como elle era Tacafaxi. ponte alta cai lhe bem. Voicuru, & c.…… (訳:落書と呼ばれし事ころの詩で構成される、ある諷刺文は、人、あるいは、事項について、巧みに言及する、意図を持つ、同音異義語から成る、詩の一種である。例えば、太平記において、

木津河ノ、瀬々ノ岩波、早ケレバ、

カケテホドナク、落ツル高橋。

これは高橋と呼ばれる指揮官に作られた。彼は他の軍隊を残して秘かに木津河という川を渡り、敵軍の城塞を攻撃したが、敗北して逃げ帰り、この川で多くの人々が彼のため犠牲になった。カクルは橋を渡すと敵軍を攻撃する(意)であり、そして、彼は高橋、すなわち、高い橋なので落ツルがうまく(合う)のである、など。(183丁表)

ロドリゲスによれば、詩(歌)の落書、つまり落首は、同音異義語、すなわち掛詞のような意味的重層性を利用した諷刺の歌ということになるわけであるが、「当話」については、その諷刺を支えるはずのところの意味的重層性が解明されているとは言えず、そのため諷刺もはつきりしない。

そこで、本稿では、「当話」における「落書」の意味的重層性を取り上げ、解明を試みることにする。それによって、諷刺性も明らかにされると思われる。

なお、古典文献からの引用は、複製資料を原則とするが、翻刻・翻字による場合は、そのテキストを明記する。また、ローマ字本のキリシタン資料からの引用に際しては、ローマ字を適宜漢字仮名交りに直すことがある。

二 類話との比較

「当話」には、『寒川入道筆記』(1613年成立)の「落書^付諧之事」に次のような類話(以下、「寒話」と呼ぶ)がある。「書陵部本」には、

一 かくれなき藤戸石を、上京細川殿御屋敷より室町^{註3}畠山様御屋敷へ、信長公御引なさるゝ。数日御手間入けれハ、いたつらもの、

花よりも団子の京トなりにけり

けふもいしくあすもいしく(以下略)^{註4}

とある。「当話」「寒話」ともに、室町幕府將軍足利義昭の二条御所造宮に関するものであることでは一致しているが、それぞれの「落書」の題材が「当話」では石垣工事のための石の運搬であるのに対し、「寒話」では二条御所の庭石とするための藤戸石という名石の運搬であるという点で異なっている。「落書」については、表現の相違に絞れば、第二句が、「寒話」では「団子の京ト」とあるのに対し、「当話」では「だごの京とぞ」とあることが挙げられる。「当話」では、「団子」を「だご」とし、撥音無表記の仮名二字で表わしたため、字数を整えるために、格助詞「と」の下に係助詞「ぞ」を補ったものであろうか。とすれば、係結びの法則で、第三句は「成にける」となるのが期待されることである。

三 「当話」に関する先学の言及

「当話」に関わる先学の言及は、ほぼ「当話」における注釈に限られている。

まず、角川文庫本『醒睡笑（上巻）』（角川書房・一九六四年刊）（以下、『角川』と呼ぶ）では、校注者の鈴木棠三氏は、始めて京都に石垣の普請仰付けられ、花よりもだご、いしいしに、それぞれ、脚注一、二、三を付している。脚注一には、「永禄十二年春、足利義昭のため新邸を建造した時のこと。」とあり、事柄として説明されている。脚注二には、「花より団子。風流より実益。」とあって、だごが「団子」であることが指摘され、花だごが具体的な意義から、句全体での慣用句として意義（風流、実益）において機能していることが示されている。脚注三では、「女房詞で団子をいしいし」と説明され、「いしいし」の語釈になっている。これらの注から推測すると、「いしいし」は、「石」と、「団子」の女房詞としての「いしいし」とが掛詞になっていることになるから、この「落首」（落書）では、現今の京において、風流よりも石垣工事が大事になっているということを詠んでいると解されていると思われる。なお、「当話」の補注には、「寒話」を引き、

〈「寒話」の…漆崎注〉室町昌山様は、足利義昭。永禄十二

年二月、二条勘解由小路に義昭のために室町邸を造営する時、藤戸石という巨石を移すため、信長は自らこれに臨み、笛太鼓で安々と曳かせた。全工事は僅か七十日で成った^{注6}と史実と絡めて補足している。

次に、現代語訳の東洋文庫『醒睡笑』（平凡社・一九六四年刊）（以下、『東洋』と呼ぶ）では、訳者の鈴木棠三氏は、現代語訳の「当話」に後注を付け、

団子を女房ことばで、いしいしという。いしはおいしい。『寒川入道筆記』には信長が巨石藤戸石を足利義昭邸へ数日ばかりで運ばせたので、いたずら者が詠んだとある。

ここでは、女房詞としての「いしいし」の「いし」が〈おいしい〉を意味する語であることと、「寒話」の内容の簡略な紹介、及び、「寒話」が触れる「落書」の作者について言及している。

次に、『岩波』では、『角川』と同じ箇所^{注7}に鈴木氏は後注を付している。始めて京都に石垣の普請仰付けられ^{注8}には、「永禄十二年（一五六九）春、足利義昭のため新邸を建造した時のこと。」、花よりもだごには、「花よりも団子。風流よりは実益^{注9}、いしいし」には、「女房詞で団子をいしいしという。」と、それぞれ説明があるが、後注一では、「永禄十二年」の後に「（一五六九）」と西暦が加えられたこと、後注二では、「花より」の後に助詞「も」が添えられたこと以外には相違がなく、注の内容はほぼ同じである。

次に、鈴木棠三氏著『醒睡笑研究ノート』（笠間書院・一九八六年刊）では、「当話」を掲げた後に「寒話」を引用し、「当話」の二条御所造営工事の拠所となると思しい史料『統応仁後記』（『重編広仁記』へ二二年刊）所収）を掲載している。『統応仁後記』巻十「二条御所造営御移徙事」禁中御修理事」からとして、

去程二二条ノ御所御普請ノ義夜ヲ日ニ継テ急カレレ共在京ノ諸軍勢ニ侍ハ多クシテ人足ノ下部寡キ故造工ノ果取行カサリケレハ信長自身普請場工出行メ公方家ノ御作事誰力是ヲ疎ニ可存哉ト奉行ニ交リ諸事ヲ下知シ精誠ヲ尽シ奔走セラル是ヲ見テ諸侍ノ歴々皆自身土石ヲ運ヒ人足ニ交テ造営ヲ急キケル程ニ其レヨリ不ニ幾程ノ御普請悉成就シケリ御庭作ラレケル時ニ故細川氏綱カ旧宅ニ藤戸石トテ名石ノ有ケルヲ信長自身奉行ヲシテ絹布ヲ以テ石ヲ包マセ花ヲ粧リ木遺ヲ謡ハセ笛太鼓ニテ囃立テ多勢ニ引セテ此大石ヲ即時ニ御所工引付サセケリ又丸山八海ト云石ハ昔慈照院殿ノ御時花ノ御所ニ建置シ名石ナルヲ取寄セテ皆御庭ニ立ラレ、其外名石名木名草種々ノ奇物ヲ取集メテ御庭構モ不日ニ成就ス然ル上ハ頓而吉日良辰ヲ撰ハセテ同四月六日公方家彼新御所工御移徙有り。^註

（以下略）

と引いている。かなり詳細な記述で、江戸中期の史書では、さらに「丸山八海」という名石も運搬されたことになっている。

なお、「当話」の「落書」の「いしいし」が、「石石」と、「団子」

の女房詞としての「いしいし」との掛詞になっていることは、岩淵悦太郎氏の「醒睡笑と女房詞・東国方言」（日本語教育振興会『日本語』二ノ三・一九三〇年三月）において、既に指摘されている。なおこれも信長に関連したものであるが、『醒睡笑』の巻一落書の項に、次のごとき話がある。

信長公始て京都に石垣の普請おほせつけられ、毎日石をひく音喧しかりければ、

花よりもたこの京とぞなりけるけふも石々あすもいし
く（『滑稽本集』五〇九頁）

この狂歌も、もし女房詞を知らなければ解することは出来ない。女房詞で団子のことをいしくと言う。第二句の「たこ」は団子であろう。かくて「石々」と「いしく」（団子）とをかけたものとするならば何の奇もないこととなる。

四 「当話」の「落書」の意味的重層性について

「当話」に関する先学の言及で、「落書」の意味的重層性の指摘があったのは、「いしく」が、「石石」と、「団子」の女房詞としての「いしいし」とで掛詞になっているということのみであった。ここでは、その点の確認を含め、他の表現においても、検討することにする。

四・一 いししく、にひらて

いししく、が「石石」を表わしていることは、ともかく、「団子」の意としての用法が女房詞であるという見解に關しては、特に論拠が示されているわけではないので、吟味する必要がある。

『日本国語大辞典(第二版)』(小学館・二〇〇〇～二〇〇二年刊)(以下、『日国』と呼ぶ)で、〈団子〉の意の「いししく」の項目の挙例となつている、女房詞の代表的な資料である、『御湯殿上日記』の記事中の使用例が、当該「いししく」の確実な古例と思われる。『日国』では、文明十年(一八六九年)正月二日の記事からの例として、

あしたの御いわぬ。御こわく御御いしし昨日におな^{注10}し。

と引かれている。したがつて、〈団子〉の意の「いししく」が女房詞として誕生したことは疑いない。ほかに、女房詞系の資料では、『女房騷書』(室町時代成立)「東北大学本」に、

一 たんごをはおまるともいししく、共まるめ共云と存する。

江戸時代の婦人語資料には、当該の「いししく」が、『婦人養草』(一六八六年刊)には、

たんごは いししくと

と見え、『女重宝記』(一六九二年刊)には、

一 だんごは いししくと

とあり、『女中詞』(一六九二年成立)「国会図書館本」には、

いししく

丸く 団子

と存し、『女中言葉』(一七二二年成立)「東北大学本」には、

いししく
まるく たんこの事

とあつて、『女言葉』(一七二二年成立)「東北大学本」には、

一 たんこの事 (いししくと)
まるく

などと拾える。また、方言資料の『物類称呼』(一七七五年刊)には、『大坂屋本』によれば、

団子だんご伊勢にて。をまりといふ。女詞にいししくと云 尾州にてはひらめに丸きをいししくといふ(以下略)

と述べているから、少なくとも江戸中期ごろまでは、当該の「いししく」は婦人語であったことは確かである。『日葡辞書』(一六〇三年刊)で出自が女房詞であることが期待される語の解説に“Palaura de molheros”(婦人のことば)と説明していることや、『女重宝記』には、掲載された婦人語について、「御所のことばづかひなれ共地下にも用ることおほし」と述べていることから、江戸時代の早い時期には、概ね婦人語として一般化していたと考えられる。

それゆえ、「当話」や「寒話」の「落書」の作者は男性であるうから、当人にとっては、使用語彙ではなく理解語意であること

るの、当該の「いしいし」を掛詞にするために敢えて用いたということになる。そこに、諧謔や揶揄の意図が込められているよう。

四・二 「花よりもだご」について

「花よりもだご」の「だご」は、前述したように、「だんご」の撥音「ん」の無表記形であるから、「花よりも団子」を表わしているわけである。「花より（も）団子」は、古例として『誹諧連歌抄』（1506年以前成立）にある、

花よりも団子とたれか岩つつじ^{注1}

の句が知られている。『醒睡笑』の成立時に近いものとしては、『犬子集』（1668年成立）に、「早稲田大学図書館蔵本」の

花よりも団子^{だんご}やありて帰雁^{かへづりは}

がある。「三『当話』に関する先学の言及」において見てきたように、「花より（も）団子」は、風流よりも実益を重んじたとえとして周知の慣用句ではあるが、「当話」の場合、仮に、「いしいし」＝「団子」ということで、石の運搬（石垣工事）を実益と解すると、それと対比されるはずの風流、すなわち「花」が何のことになるのか判然としないのである。

とすれば、そもそも、「当話」の「花よりも団子」を、風流よりも実益を重んじたとえとして捉えることが、適切なのかという問題が生じてくる。

改めて、「当話」における、「花」と「団子」が何を指しているのか、検討することが必要である。

四・三 「だご」について

まず、「だんご（団子）」について、その語義を見ると、『日国』には、

だんご【団子】《名》①穀物の粉を水でこねて小さく丸め、蒸し、またはゆでたもの。醤油の付焼にしたり、あん、きな粉などをつけたりして食べる。*米沢本沙石集（1283）五本・八「せなかの上くぼみたるゆへにたにといふべくは、団子もくぼみたり」*文明本節用集（室町中）「団子ダンゴ 小餅」*浮世草子・好色一代男（1688）六・四「きぬかへ、初雪、火燧（こたつ）の火にて、おけそくの団子（ダンゴ）を手にふれ茶事せし事見て興あり」*黄表紙・高漫齋行脚日記（1776）中「おらは花より朝比奈切通しのだん子がくいたいものだ」*小学読本（1813）〈榊原芳野〉一「粽は団子を、茅の葉、菰の葉にて包みたる食物なり」②①が丸いところから転じて、人の言行が角ばらないこと。うまくその場をおさめること。うまく丸めこむこと。*洒落本・太平楽巻物（1782）「ながふいへばどふやら団子（ダンゴ）らしいが、あつたら器量をもちながら、

さりとはいやしのおまへの商売」*洒落本・一目土堤(1788)「おみややおつねが、団子(ダンゴ)をいっていいや、やとでむりに出した」*歌舞伎、辰橋脊御撰(1833)序幕「物事団子にやらかさう」③(形動)くちやくちやとひととところにかさなっていること、かたまっていること。また、そのさま。④弾丸。銃弾。⑤囲碁で、一方の石が一方所に凝集させられて、働きのない形。絞られた場合などによくできるまじい形。⑥刑事をいう隠語。〔隠語輯覧(1915)〕⑦密淫売婦または曖昧料理屋の酌婦のこと。〔隠語輯覧(1915)〕(以下略)

と、七義立てているが、①以外は、少なくとも「当話」の頃に存しておらず、事実上軍義であるから、「だんご(団子)」の語義内で掛詞は成り立ち得ない。

次に、「だご」の同表記異義語について、「当話」の頃に存した可能性のある語を、『日国』で見ると、「たご(夙)」、「たご(蝸)」、「たご(多故)」、「たご(脊瘡)」、「たご(胼胝)」、「たご(拍桶)」、「たご(唾壺)」、「だつご(脱誤)」（促音が無表記の場合として）、「たご(単孤)」、「たご(丹後)」、「たご(拍桶)」、「たご(端午)」、「だんご(談合豆)」などがあるけれども、いずれも文脈上、「だんご(団子)」と掛詞には成り兼ねる。

では、ほかにどのようなことが考えられるか。

「当話」の「落書」では、〈団子〉を意味する語が二語三箇所用

いられていることと、「当話」の主役が信長であることが、注目される。「当話」の注釈等では触れられていないが、実は、「当話」は信長の団子好きが前提となつていてと考えられるのである。『醒睡笑』とほぼ同時期に成立の『きのふはけふの物語』(1614〜24年頃成立)には、信長の団子好きをめぐる笑話が掲載されている。「大東急記念文庫本」によれば、次のとおりである。

一 おたののふなか公時々けうにたんこをきこしめすよくまひるとて京わらんへ共上さまたんこと申を一段とそこつ成小性御前かき所にてちかくと申これを聞給ひて御ふくりうなされすてに御かんきをかうふらんとせしを一けい道三おりふし御せんにありて御もつとものきにては候へ共世上にさやうに申事返御ほまれにて御座候其ゆへは昔てん子ちまきを御らんして一たむをもしろきよしちよくちやうあればそれよりしてきやうわらむへとも内りちまきと申ならはし候と申されければのふなか御きけんなをり右の御小性御しやめんなさるそうしてうへくの御そはにこれあらむ人は万事にきつかひいたさう事ちや

信長の団子好きが京で有名になつていて、頻繁に食するので、京の口さがない連中が、「うへさまだんご」と呼んでいることを報告した小姓が、信長に激怒され、すんでの所で、手打ちにされるどころだったという話であるが、『醒睡笑』などの他の咄本には

この類話は存しない。元となった逸話について、「下に信長を上様といい、一溪道三が登城する（刈本等）」とあるから、その成立は、信長が足利將軍義昭を逐つて名実共に天下の実権を握つた天正元年（一五七三）七月以降、本能寺の変で斃れる同十年六月までのことであろう。」と推定する見解があるが、元のエピソードを笑話化する際に、呼称や登場人物の配置等が改めて構成されている可能性も十分に考えられる。

ところで、信長は、日本人で最初にコンペイトーを食べた人物として知られている。信長は、自身に献上されたもののうち、自分が気に入ったものしか受け取らない人物であるが、宣教師ルイス・フロイスの献上したコンペイトーがかなり気に入ったらしく、少なくとも二度に亘り受け取っている。

私は金米糖入りのガラス瓶を一つと蠟燭数本を贈った。（一五六九年六月一日付ルイス・フロイス書翰）

それから二、三日後、私は再び立佐を遣わして彼を訪問させ、金平糖の入った瓶を持って行かせた。（一五七三年五月二七日付ルイス・フロイス書翰）

また、ルイス・フロイスは同じ一五六九年六月一日付けの書翰の中で、信長について、

この尾張国主は年齢三十七歳ほどで、背は高く痩せており、鬚は少ない。声はよく通り、軍事的修練に深く没頭し、粗野である。正義と慈悲の業を好み、尊大で名誉を非常に愛する。

大いに決断を秘め、戦術に関してはいとも巧みであり、規律や家臣の助言には僅か、或いはほとんど全く従わず、諸人から極度に畏敬されている。酒は飲まず、（人の）取扱には厳格で、日本の王侯をことごとく見下し、位低き者に対するかのように肩の上から彼らに語りかける。すべての人が絶対君主に対するように服従する。よき理解力と明晰な判断力をもえ、神仏やあらゆる類の偶像、いっさいの異教的占いを軽蔑している。（以下略）

と述べ、信長が飲酒をしない人物であることが指摘されている。ルイス・フロイスが、信長に少なくとも二度コンペイトーを贈り、それをその都度受け取っているのは、信長が飲酒を好まなかったことと関係していると思われる。『太閤記』（625年成立）の「或問」には、宣教師たちの布教活動に関して、

上戸には、ちんた、ぶだう酒、ろうけ、がねぶ、みりんちう。下戸には、かすていら、ぼうる、かるめひる、あるへい糖、こんべい糖などをもてなし、我宗門に引入る事、尤ふかゝりし也。

とあり、宣教師たちの、酒を飲まないところの「下戸」に対する勧誘品の一つとして、コンペイトーが挙がっている。すなわち、酒を飲まない信長は、嗜好品として、団子やコンペイトーなどを特に気に入っていたと推測されるのである。したがって、当該「落書」には、〈団子〉の意の語が二語三回、しかも「けふもいし」

「あすもいしく」と表現され、信長の団子(の食事)は連日であることを含意していると考えられること、『きのふはけふの物語』では、信長の団子好きが「うへさまだんご」と称されていることからすれば、当該「落書」の「だご」は、ここでは、信長のことを比喩的に指しているかと解されるのである。

四・四 花 について

当該「落書」の「だご」が、比喩的に信長のことを指しているとするれば、「だご」と対比されるころの「花」は何を指していることになるのだろうか。

四・三で行ったように、まず「はな(花)」について、その語義を見ると、『日国』から、用例を省略して語義のみ挙げると、

はな【花・華・英】『名』□植物の器官の一つで、一定の時期に美しい色彩を帯びて形つくるもの。①種子植物で、有性生殖を行なうために分化した花葉と花軸の総称。花葉には花冠(萼片・花弁)・雄しべ・心皮の区別がある。花弁は時には萼片や苞葉とともに、美しい独特の色彩を持つが、実際には緑色のものが多い。また、これを構成する各花葉の有無により完全花・不完全花、雌しべ・雄しべの有無で単性花・両性花などに区別する。普通、つぼみが開いたもので、受精して実を結ぶ。また、隠花植物の胞子穂などを

いうこともある。②(春、百花にさきがけて咲き、また奈良時代以来その愛好が盛んであったところから)特に梅の花をいう。③(それが春を代表する花であるところから)特に桜の花をいう。平安後期に固定したものとみられ、以降「花」すなわち「桜」の用法が多い。④①が咲くこと。開花。特に桜の花にいう。⑤①を見て賞すること。特に桜の花にいう。花見。⑥①のうち、神仏に供えたり生け花としたりするもの。①のついていない枝葉などをいう。⑦(仏前に供えるところから)植物「しきみ(楡)」の異名。⑧花をいけること。いけばな。花道(かどう)。お花。⑨露草の花びらからしぼりとった青色の絵の具。これを和紙にしませて青花紙(あおばながみ)を作る。⑩露草の花の淡い藍色をいう。また、花染。⑪米、麦、大豆などの原料に繁殖した麴黴(こうじかび)。麴花(こうじばな)。また、麴のこと。⑫自然界の美の代表として、また、春の風雅の対象物の代表としていう。「花ほととぎす月雪」「雪月花」など。□(色や形から比喩的に用いる)①雪、霜、白波、月光、灯火などを、その形状や色合の白の意識をなかだちとして花に見立てていうことは、「雪の花」「氷の花」「波の花」「湯の花」「硫黄の花」「火花」「風花」など複合語となることが多い。②灯心がどぼって、その先端が白く灰状

になったもの。③瘡(かさ)、あるいは発疹。「熱の花」④
 茶を煎じたとき表面に浮くあわの、軽く細かいものをいう。
 ⑤月経。③花にあやかったり、花をかたどったり、あるいは
 花を描いたりした物や事柄。①造花。つくりばな。かざ
 りばな。②散華(さんげ)に用いる紙製の蓮の花びら。③「纏
 頭」とも書く。花の枝につけて進物の意から)④芸人や力
 士などに祝儀として与える金品。また、祭りの寄付をもち
 う。かずけもの。てんとう。心付け。紙花と称して、紙を
 ひねって与え、のちに現金に換えることもある。⑤「とこ
 ばな(床花)」に同じ。④俳諧・狂歌の添削料のこと。入
 花(いればな)。点料。⑤上方で、芸娼妓や幫間(ほうかん)
 の揚げ代をいう。花代。⑥上方で、芸娼妓の花代を計算す
 るために用いる線番。また、それによって計る時間。芸娼
 妓を揚げると、置屋の線番場に線香を立て、その一本が焼
 えつきるのをもつて花一つとして時間を計る。時計を用い
 るようになってもう。⑦芸娼妓・幫間(ほうかん)が、
 線番による計算で座敷に呼ばれること。⑧ウンスンカルタ
 の組札の一種。剣や筒の頭に花のついた図柄のもの。全部
 で九枚あり、「ロハイ」(飛龍を描いたもの)に花のついた
 ものを貴び、この札を持った人から打ち始める。⑨花カル
 タ。花札。また、それを用いて行なう競技。花合わせ。⑩
 連句の花の定座(じょうざ)。また、花の句。⑪昔の菓子

の名。丸くて平たくて花弁に似た形のもの。もとは吉野で、
 年頭に蔵王権現に供えた餅を碎き、米を加えて作り、二月
 一日、諸人に配る餅。花(はな)の果物。④花の美しく、
 咲き栄えるさまにたとえていう。①(形動)はなばなく
 栄えること。美しく盛んなこと。はなやかなこと。栄華。
 繁栄。②(「花の…」の形で)美しいさま。華やかなさま
 を表す。ほめことばとして用いる。③世阿彌(ぜあみ)の
 能楽論の用語。観客に感銘を与える芸のおもしろさ、珍し
 さ。能として表現されたおもしろさをいい、また一方で、
 おもしろく見せようと工夫し、珍しさとは何かを感得する
 演者の心のはたらきをもう。④舞台、演芸などで、表現
 のはなやかさ。はなやかな個性。⑤男女のはなやかなさか
 りをいうことば。また、特に美しい女をいい、さらに遊女
 をもさす。⑥豪勢な遊び。贅沢な遊興。楽しいこと。特に、
 色事をいう。情事。⑦もつともよいこと。もつとも貴いこと。
 多く、「…が花」の形で限定して、その範囲のうちだけが
 よい、という意で用いる。⑧(「…の花」の形で)ある範
 囲の中にあつて、見ばえのするもの。また、よりぬかれた
 本質的なもの。精華。精髓。⑨実に対して、花のあだなき
 ま。本物でないもの。あるいは、花のうつろい、はかなく
 散るさまにたとえていう。①(形動)人の心などに誠実さ
 がなく、あだなこと。うわべだけであること。また、その

さま。②(形動)人の心や風俗などの変わりやすいこと。うつろいやすいこと。また、そのさま。③文芸論の用語として、実に対していう。和歌、俳諧などで、意味内容を実にたとえるのに対し、詞(ことば)をさすことが多い。すなわち、表現のたくみさ、おもしろさ、表現上のはなやかさなど。④外観。うわべ。また、そのはなやかさ、美しさ。また、見かけだけのはなやかさで、実質の伴わないこと。虚飾。浮華。⑤本籤(ほんくじ)のほかに、若干の覚金が出る籤。花籤。因隠語。①盗人仲間で塩のことをいう。②不良学生仲間で警官をいう。③盗人仲間で美人をいう。④盗人仲間で着物をいう。⑤女子学生間で、ひいきのことをいう。(以下略)

と、極めて多義であるが、「はな(花)」の語義内での掛詞は考えにくい。

次に、「はな(花)」の同表記異義語について、『日国』で見ると、「はな(端)」、「はな(鼻)」に限られるようであるが、これらの掛詞も考えがたい。

ところで、前引した『続応仁後記』には、「当話」や「寒話」では触れられていないところの、足利義政の治世の時に建て置かれた「九山八海」という名石も、二条御所の造宮にあたっては、花ノ御所から運ばれたと記されていた。『角川古語大辞典』(角川書店・一九八二〜九九九年刊)によれば、「花の御所」とは室町幕

府三代將軍足利義満の造営した室町殿の別称であるが、草木の花を植え立てた美観をめで誇つての名称であり、特に八代將軍足利義政の再建したものを指していることが多いことなので、『続応仁後記』では、義政の治世の時に、「花の御所」にあった「九山八海」を、信長が二条御所の庭石として運ばせたとしているわけである。

ところが、二条御所の造営工事に関して、その約三十年後の史料『信長公記』(1598年成立)には、「永祿十二年二月二十七日」の条には、次のようにある。

永祿十二年己巳二月廿七日辰の一点御鋤初在之方に石垣両面に高く築上御大工奉行 村井民部島田所之助被仰付洛中洛外に鍛冶番匠杣を召寄隣国隣郷より材木をよせ夫々に奉行を付置無由断候之間無程出来訖御殿の御家風尋常に鍍金銀庭前に泉水遣水築山を構其上 細川殿御屋敷に藤戸石とて往古よりの大石は是を 御庭に可被立置の由にて 信長御自身被成御越彼名石を綾錦を以てつゝませ色々花を以てかさり大綱餘多付けさせられ笛大鼓つゝみを以て囃し立 信長被成御下知即時に庭上へ御引付候并東山慈照院御庭に一年被立置候九山八海と申候て都鄙に無隠名石御坐候是又被召寄 御庭に居させられ(以下略)

この記述では、義政の別邸東山山荘(東山慈照院殿)の庭にあった「九山八海」を二条御所に運ばせたことになっている。

次に『信長公記』の成立の約九十年後の史料『織田軍記』(1688年頃成立)の「信長公被_レ馳上_二事_一」(二条御所御普請所々御仕置事)の条では、

永禄十二年正月九日、吉日なれば勢州へ御出馬あるべしとて、……今春は堅固に御所を造らるべしとて、数日御相談の上に、二条勘解由小路武衛陣の前の御所の焼跡を、東北へ一町つゞひろげられ、堀ほりまはし石垣築上げ、先規のごとく経営して、……中にも御庭作らるゝ時、細川が屋敷に、古来より藤戸石とて名石ありけるを、御庭に立てらるべしとて、信長自身彼の館_{タテ}へ御越なされ、様々に御下知あつて、彼の石を綾錦にてつゞませられ、色々の花にてかざり、笛太鼓にてはやしたて、木やりをうたはせ、即時に御所に引きつけらる、……又昔東山殿慈照院義政公の御治世の時、御庭に立てられると申し伝へし九山八海と云ふ石も引きよせ、御庭にすゑられけり_{注19}

とあり、義政の治世の時ということなので、明記はされていないが、「九山八海」は、室町殿、すなわち「花の御所」にあつたときれていることになる。

とすると、『信長公記』の成立ごろから『織田軍記』の成立ごろまでの間に「九山八海」の元の所在場所が東山山荘から「花の御所」に書き換えられたことになるが、「寒話」や「当話」の成立時、元来の「九山八海」の所在地についてどのように思われている

たのかは、今は明らかにしがたいが、いずれにせよ、「九山八海」が、義政の居所の庭にあつた名石であつたことは確かにちがいない。かつて栄花を誇つた「花の御所」の代表的な主であつた義政の屋敷にあつた名石やその他の主だつた石の運搬が、信長の指揮のもと、信長によつて將軍職に就くことができた足利義昭の二条御所造営のために行なわれたという出来事は、京における、最高実力者が、実質的には、室町將軍ではなく、信長であることを象徴する事件として、京の人々は、受け留めたと思われる。

これらのことを整合的に捉えれば、「寒話」や「当話」の「落書」の「花」は、「花の御所」を下略したものであり、そして、それは「花の御所」の主である室町將軍(家)のことを指していると考えることが出来る。当該の「花」が室町將軍(家)のことを指しているという推測は、信長のことを比喩的に指すと思われる「だご」と対比される「花」は、信長と対比される存在であることが期待されることも辻褄が合う。

つまり、「花よりも団子の京と成にけり」とは、京の当時の最高実力者が、室町將軍(家)ではなく、織田信長であることを、比喩的に風刺的に表現したものと言うことができるのである。

五 おわりに

以上、『醒睡笑』所収笑話における「花よりも団子」の意味的

重層性について検討してきた。類話との比較、他の咄本の笑話との比較、先行研究や史料の検討などによって、結局、ここでは「だご」は、団子好きであることから信長のことを比喩的に指し、「花」は「花の御所」の下略したものであり、その主の足利将軍（家）のことを比喩的に指していることを明らかにした。

この「落書」は、「花よりも団子」という、慣用句を借り、京での事実上の最高実力者の交替を詠んだものということになる。しかも〈団子〉の意の語が延べ三回用いられていることには、京が信長の時代になったことへの、京の人々の衝撃の大きさが現れていると解することができる。

また、〈団子〉の意の語として婦人詞の「いしいし」が二度用いられていることについては、ルイス・フロイスの『日欧文化比較』（1585年成立）によれば、ヨーロッパと日本との飲酒文化の違いの一つを、

われわれの間では酒を飲んで前後不覚に陥ることは大きな恥辱であり、不名誉である。日本ではそれを誇りとして語り、

「殿Tonoはいかがなされた。」と尋ねると、「酔払ったのだ。」と答える。^{注10}

と指摘しており、信長が酒を飲まず、団子好きであることを、勇猛な武将には不似合いなこととして揶揄する意図もあったかもしれない。

なお、「寒話」や「当話」では、信長の団子好きを明示せず、また、

石の運搬の対象として足利義政の旧宅にあった「九山八海」に触れていないのは、当時としては良く知られていたことであるからこそ表現することを、憚ったとも考えられる。

注1 岩淵匡編（『醒睡笑文庫版』本文篇（改訂版）』笠間書院・二〇〇〇年刊）、一六ページ。

注2 『岩波文庫本』醒睡笑（上）』、四三三ページ。

注3 「畠」は「昌」の誤。

注4 『喃本大系』第一卷（東京堂出版・一九七五年刊）、二四ページ。

注5 『角川文庫本』醒睡笑（上巻）』、三三三ページ。

注6 注4同書、二九三ページ。

注7 東洋文庫『醒睡笑』、一五五ページ。

注8 注2同書、四五五ページ。

注9 『新訂増補史籍集覧』第一五冊（臨川書店・一九六七年刊）、五〇六ページ。

注10 『統群書類徒』補遺三（統群書類徒完成会〈訂正三版〉、一九五五年刊）、五一ページ。

注11 『新潮日本古典集成』第七七回（新潮社・一九八八年刊）、二〇三ページ。

注12 『新日本古典文学大系』第六九卷（岩波書店・一九九一年

刊)、二九ページ。

注13 『日本古典文学大系』第一〇〇巻(岩波書店・一九六六年刊)、五〇五ページ。

注14 松田毅一監訳『十六・七世紀イエズス会日本報告集』第三期第3巻(同朋舎・一九九八年刊)、二九九ページ。

注15 松田毅一監訳『十六・七世紀イエズス会日本報告集』第三期第4巻(同朋舎・一九九八年刊)、二二〇ページ。

注16 注14同書、二九二ページ。

注17 『新日本古典文学大系』第ハ〇巻(岩波書店・一九九六年刊)、九ページ。

注18 『新訂増補史籍集覧』第二三冊(臨川書店・一九六七年刊)、五七〜八ページ。

注19 『通俗日本全史』第七巻(早稲田大学出版部・一九二二〜三年刊)、二四〜五ページ。

注20 岡田章雄訳注『ヨーロッパ文化と日本文化』岩波書店・一九九一年刊)、一〇二ページ。

〈うるしぎきまさと／本学教授〉

第一〇一号 目次

二〇一九年六月

漱石・樗牛のホイットマン論(上)……………関 谷 博
大東急記念文庫本『きのふはけふの物語』における

「下々」の語をめぐって……………漆 崎 正 人
文章論序説(二) —文化としての言語(コセリウに寄せて) —

……………揚 妻 祐 樹
北海道方言における自発の助動詞サルの使用実態

—主に世代差・男女差について—……………秀 舞 子
二〇一八年度 日本語・日本文学科 卒業研究題目一覧

一冊 五〇〇円